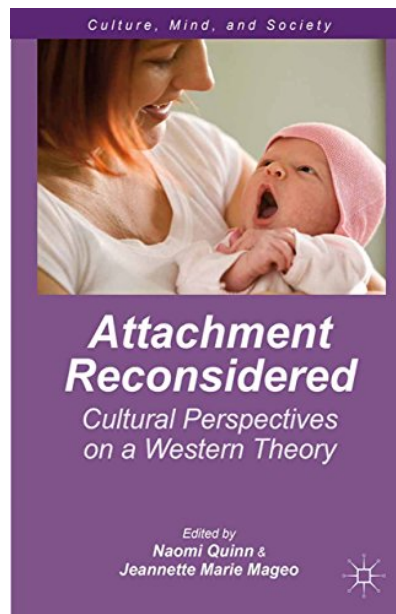


Naomi Quinn & Jeannette Marie Mageo (eds.), *Attachment Reconsidered: Cultural Perspectives on a Western Theory*, New York: Palgrave Macmillan, 2013, 261p, \$33.00.

杉尾 浩規

本書『アタッチメント再考——西洋理論に関する文化的視点』は、ボウルビィ (Bowlby, J.) に由来する現代のアタッチメント理論を文化という視点から捉え直すことを目的とした学際的な共同研究の成果をまとめた論文集である。ボウルビィ (e.g. 1991, 1993) によれば、アタッチメントとは、個体の保護という生物学的機能を有し、特定他者への接触・近接及びそれらの維持を目標とする行動制御システムとして組織化された、ヒトとしての人間に普遍的な情緒的絆である。そして、この絆は、主要な養育者 (一般的には母親) との関係を通して組織化され、対象を変えながら情緒的対人関係の雛形として生涯に渡り継続すると仮定されている。本書の中心的な意図は文化要因への関心に基づくアタッチメント理論の普遍的妥当性への問題提起であり、文化特異性を踏まえたアタッチメントの多様性研究が模索されている。執筆者十二人が広義に人類学者として括られることから、本書をアタッチメントの人類学的アプローチの試みとして位置付けることができるであろう。アタッチメントの文化要因への関心の高まりがアメリカの人類学及び文化に関心を向ける心理学を中心として急速に広まっている最近の研究動向を考慮するならば、この種の関心の形成が待たれる日本において本書を紹介することは有意義であると評者は考える。以下では、本論文集を構成する計九本の論文及び「あとがき」を本書の区分に従い四つに分けて順次要約する。そして最後に評者のコメントを手短に付す。

第一部「枠組み (A Framework)」にはイントロダクション「アタッチメントと文化 (Attachment and Culture)」(Naomi Quinn & Jeannette Marie Mageo) と第一章「アタッチメントのパズル (The Puzzle of Attachment)」(Suzanne Gaskins) という二つの論文が含まれる。共通する論点はアタッチメント理論の普遍的妥当性に対する問題提起であり、それは具体的にはエイズワースら (e.g. Ainsworth et al. 1978) によりアメリカ白人中流家庭の母子をサンプルとして案出された乳幼児のアタッチメントの個体差を測定する「ストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation Procedure : SSP)」に向けられる。SSP は、実験的環境の中で親との分離や見知らぬ人との対面によって子ども (一歳頃) にほどよいストレスを与え、その反応に基づきアタッチメントの質を分類する手法



であり、ボウルビイのアタッチメント理論の実証的な検証手段という重要な役割を担う。その分類は、Aタイプ(回避型)、Bタイプ(安定型)、Cタイプ(抵抗/アンビバレント型)の三つからなり、安定型のBタイプに対してAとCタイプは不安定型とされる。Bタイプの子どもは、SSPにおける母親との再会場面で、自らストレスを制御する傾向にある。対して、AとCタイプでは、両者の間に過度の距離(A)や怒りを伴う抵抗(C)が引き起こされる。エインズワースらは、安定的なアタッチメントの主要因として、養育者の「感性(Sensitivity)」(子どものアタッチメント欲求を適切に読み取り的確に応答すること)を仮定した。つまり、SSPが表示するのは、発達早期の子どもと養育者の間で営まれてきたアタッチメントを巡る相互作用の質であるとされる。

第一部「枠組み」の二つの論文は、SSP及びそれが表示すると想定されているアタッチメントの個体差分類が現在のアメリカ白人中流家庭(あるいはより広義には西洋)における理想的な養育に関する「民俗理論」(p. 5)であり、その比較文化的妥当性は保証されないと主張する。この立場に従うならば、SSPが表示しているのは、養育者(の「感性」との相互作用経験に起因する子どものアタッチメントの安定度ではなく、子どもが内在化した養育者の実践する養育関係あるいはその背景となる文化特異的な養育環境に根ざした対人関係パターンであることとなる。QuinnとMageoは、これら二つの対立的視点が伴う論点を示すためにワイズナー論文(2007)で記述されているエピソードを紹介する(p. 10)。それは、自分の子どものSSPによるアタッチメント分類がAタイプ(回避型)、つまり養育者との相互作用経験が距離を置いた関係性であるとされた母親に関する。この母親は、SSPにおける自らの子どもの行動パターンを、自分が実践してきた独立を目標とする養育の成果であると誇らしげに語った。「この母親は自分の息子の行動に「独立的」というラベルを貼る一方で、理論的な分類体系は彼に「回避的」というラベルを貼る。実験状況におけるパフォーマンスに基づいて、子どもの行動が成人の養育者と子ども自身の双方にとってどのような意味を持つのかを理解することなく、一定の文化的実践のまともりに従って育てられた子どもに「不安定に形成されたアタッチメント」というラベルを貼ることは、悪しき科学的慣例である」(p. 10)。

このようなアタッチメント理論の普遍的妥当性への問題提起から、QuinnとMageoは、多様な養育環境における文化化(学習)という枠組みの中での、民族誌記述を中心としたアタッチメントの文化特異的意味の探求の必要性を強調する。ただし、その試みがアタッチメントの進化論的基礎や生物学的適応という論点の批判ではなく、普遍的適応の文化的可塑性の強調であることも同時に確認される(p. 18)。これを踏まえて、Gaskinsは、アタッチメントの普遍的次元と文化特異的次元の選り分け作業を提案する(pp. 42-43)。具体的には、アタッチメントを子どもの認知的・身体的な普遍的発達プロセスの一部として捉え直し、子どもの発達と社会関係の相互作用という一般的な視点から文化化プロセスを民族誌的に記述する、という探求方法が提案される。このように、第一部「枠組み」は、本書の関心の所在を理論的・学説史的背景の中に位置付ける役割を担っている。

第二部「養育(Caregiving)」には第二章「ハッザにおける協同養育(Cooperative Child Care among the Hadza)」(Alyssa N. Crittenden & Frank W. Marlowe)、第三章「狩猟採集民アカにおける協同育児とアタッチメント(Cooperative Breeding and Attachment

among the Aka Foragers)」(Courtney L. Meehan & Sean Hawks)、第四章「子育てには村全体が必要だ(“It Takes a Village to Raise a Child”)」(Susan C. Seymour)という三つの論文が含まれる。これら三つに共通する論点は、アタッチメント研究の主要な関心対象である母子二者関係に限定されないアタッチメントの多様性であり、その形成誘因としての「協同育児」である。協同育児は、進化論的視点からヒトとしての人間に特異な養育行動パターンとして強調される。その際特に注目されるのは、人間の子どもにおける早期の離乳及び離乳後の長期にわたる依存という特徴が母親に及ぼす影響である。子どもの早期の離乳は母親が出産間隔を短期化することを可能にする。また、離乳後の子どもの依存は母親による長期にわたる子どもの養育を必要とする。そして、これら二つの特徴が意味するのは母親への過度の負担である。協同育児は、短期の出産間隔で長期にわたる子どもの養育を可能とするのに最適な繁殖戦略として採用された、進化上の選択肢として位置付けられる(pp. 69-72)。これは、ボウルビィが依拠した進化論的視点を徹底させることにより、母親に限定されない多様な養育者あるいは文化特異的な養育環境の中にアタッチメントを位置付ける必要性を示唆している。

第二章と第三章では、このような進化論的視点から、協同育児とアタッチメントが考察されている。Crittenden と Marlowe は、第二章において、タンザニアの狩猟採集民ハッザの協同育児を考察する。ハッザでは母親に加えて多様な養育者による協同育児が実践され、その中には抱っこも含まれる。生後四歳までの抱っこを指標とした調査は、子どもの加齢と共に抱っこの総頻度は減少するが、抱っこに参加する協同養育者の総数は減少しないことを明らかにした。このことは、持続的な協同育児が母親の養育に費やす時間を削減し他の活動への参加を容易にすることを示す(pp. 74-75)。Meehan と Hawks は、第三章において、中央アフリカ共和国の狩猟採集民アカの協同育児とアタッチメントの関係を考察する。アカではハッザと同様に協同育児が実践される。しかし、接触・近接及びそれらの維持というアタッチメントの行動特徴を指標とした調査は、全ての協同養育者がアタッチメント対象になるのではないことを明らかにした(母親を含む共同養育者の平均人数は六人)。その際特に、その違いが各養育者の「感性」に起因する可能性が示されている(pp. 96-101)。他に、著者の一人である Meehan によるアカの子どもを対象とした修正版 SSP の試みが失敗に終わった経験を踏まえ、SSP の比較文化的妥当性が文化的バイアスとの関連で論じられている(pp. 89-90)。

Seymour は、第四章において、第二章及び第三章と進化論的視点を共有しつつも、文化特異的な協同育児の多様性を二つの社会の比較を通して検証する(pp. 116-117)。比較は、デュ・ボア(Du Bois, Cola)の古典的民族誌『アロールの人々(*The People of Alor*)』(1944)に基づくインドネシアのアロール島民と、自らの調査に基づく北インド・オリッサ州の州都ブバネーシュワルにおける文化化プロセスの違いを焦点とする。協同育児が実践され子どもの母親へのアタッチメント形成が確認できるという点で二つの社会は共通する。しかし、両者には文化特異的な対人関係パターンの経験(学習)に関して著しい違いが存在する。アロールでは、二歳以降の子どもは協同育児ではなく相互独立的な対人関係パターンを経験し始める(pp. 122-125)。対して、インドでは、協同育児は相互協調的な対人関係パターンに関する文化化プロセスの中に組み込まれている(pp. 130-133)。この比較検討

は、アタッチメントと協同育児が文化化という枠組みの内部に位置付けられる必要性を示唆している。

第三部「自律と依存 (Autonomy and Dependence)」には第五章「スリランカ農村部におけるアタッチメント (Attachment in Rural Sri Lanka)」(Bambi L. Chapin) と第六章「ムリク社会におけるアタッチメントと文化 (Attachment and Culture in Murik Society)」(Kathleen Barlow) という二つの論文が含まれる。これら二つに共通する論点は、養育者の「感性」及びその結果としての「安定的なアタッチメントに基づく自律的な子どもの発達」というアタッチメント研究の仮定を、普遍的な子どもの発達経路ではなく、現在のアメリカ白人中流家庭に典型的な対人関係パターンに関する文化化プロセスとして捉える視点である。このような視点から、Chapin は、第五章において、スリランカ(シンハラ系)の養育を階層的対人関係パターンとの関連で考察する。シンハラ系の子どもの養育の特徴は誕生以降長期にわたる子どもの欲求に対する敏感な応答性にある。しかし、その敏感な応答性は、アメリカ白人中流家庭に典型的な言語的自己表現を伴う子どもの自律性の促進には方向付けられていない。逆に、子どもの欲求は養育者との相互作用において非言語的に伝達され処理される。たとえ子どもが欲求を言語化しても、養育者は言語的会話として相互作用を営むことなく欲求に敏感に応答する。養育者は子どもから言語的表現を引き出すことなくその欲求を満たし、子どもは欲求が満たされるのを待つことを通して自制を習得する。このような子どもと養育者の関係性にはシンハラ系の階層的対人関係パターンが反映されている。子どもは、内在化した養育者との関係性をテンプレートとしながら、生涯にわたり文化的に成熟した対人関係を営むことが可能になる。ただし、シンハラ系の子どもの養育者の文化特異的に意味付けされた「感性」が引き起こすのは、子どもの自律性の欠如ではなく、階層的対人関係という文化的テンプレートを使いこなす自律性(対人関係的自律性)であることが強調される (p. 152, 157-158)。

Barlow は、第六章において、パプアニューギニアのムリク社会における養育を、独立と相互依存という二つの対人関係パターンに関する文化化プロセスとして考察する。ムリク系の子どもの養育は、母親による集中的な養育を伴う母子関係に始まり、その二者関係が協同育児へと継ぎ目なく移行することを特徴とする。Barlow は、このような二つの側面を併せ持つムリク系の子どもの養育がアタッチメントと対人関係パターンの双方に関連している点を指摘する。養育の一つ目の側面(母子二者関係)は母親への安定した一次的アタッチメントの形成及び自律性(独立)の獲得に貢献し、二つ目の側面(協同育児)は安定したアタッチメントの共同体への拡散及び社会性(相互依存)の獲得を可能にするとしてされる。ムリク系では独立と相互依存という二つの対人関係パターンが共に価値付けられ、養育はこれらの文化化プロセスとして機能する。それは、子どもが養育者(母親)の役割を内在化し年下の兄弟の養育者(母親)として振る舞うことに現れるような「養育する者/される者」というパターンとして、その後の人生における様々な対人関係の中で反復され多様化する (pp. 171-174)。更に、ムリク系では、規律の訓練や食料分配あるいはジェンダーに関する文化特異的意味を通して、養育関係(及びアタッチメント)に由来する独立と相互依存という二つの対人関係パターンの共存が表現されている。

第四部「幼年期と成人期の連続性 (Childhood-Adulthood Continuities)」には第七章「ア

タッチメントの文化精神力動論に向けて (Toward a Cultural Psychodynamics of Attachment) (Jeannette Marie Mageo) と第八章「成人のアタッチメントについての比較文化論 (Adult Attachment Cross-culturally)」(Naomi Quinn) という二つの論文が含まれる。これら二つに共通する論点は文化特異的に意味付けされたアタッチメントの生涯にわたる連続性であり、人間の心に関する精神分析の理解に基づくそのメカニズムの探求である。Mageo は、第七章において、自らの調査資料に基づくサモアとアメリカ北西部における情緒的対人関係パターンの比較分析を通して、「アタッチメントの精神力動理論」(p. 191) を探求する。アタッチメント理論に従えば、SSP の個体差分類は養育者との相互作用の蓄積の反映である。子どもの自律 (アタッチメントの安定性) はアタッチメント欲求が養育者に満たされる経験に由来し、その経験の不足が対人関係への囚われ (依存) として子どもの自律を妨げる (アタッチメントの不安定性)。対して、Mageo は、子どもが養育者との相互作用で経験する怒り (rage) の役割を重視する精神分析 (クライン) に注目し、分離の経験 (満たされないアタッチメント欲求) は養育者への怒りを伴うと同時に養育者への依存 (囚われ) を強めるという視点をアタッチメント研究に導入する。そして、アタッチメントは怒りと依存の適切な処理を通して安定化し (「弾力的安定性 (Resilient Security)」、それは文化特異的な「距離をつくる実践 (Distancing Practices)」(文化的な「分離」の実践) によって達成されるという「文化的に共有されたアタッチメント・システム」という視点が提案される (pp. 192-194)。

子どもの弾力的安定性が母親との対人関係ではなく親族集団との関係として培われるサモアでは、年長者 (集団) が示す子どもに対する無関心や処罰などによる拒絶として「距離をつくる実践」(分離) が営まれる。そして、この分離の実践によって引き起こされる怒り (依存) は、年長者 (集団) ではなく、個別的な対人関係の中に排出される。結果として、サモアでは、個人と集団の関係は安定的であるが、個別的な対人関係の中でネガティブな情動が活発化する傾向にある。他方、子どもの弾力的安定性が母親との対人関係として培われるアメリカ北西部では、母親の不在という「距離をつくる実践」(分離) が引き起こす怒り (依存) は、当の母親に向けて排出される。結果として、アメリカ北西部では、自律と依存が併存する母親との関係の中で個人の人格的境界が不安定化する傾向にある。更に、Mageo は、「距離をつくる実践」の排出物である怒り (依存) の処理という文化的役割にも注目し、スパイロの「文化的に構成された防衛」概念を念頭に置いた「文化的に構成された反動形成」という概念についても論じている。

Quinn は、第八章において、ルッツ (Lutz, Catherine) が民族誌『不自然な情緒 (Unnatural Emotions)』(1988) で論じている太平洋のイファルク (Ifaluk) 社会における情緒的表現 *fago* をアメリカ (中流家庭) における love に関する自らの調査資料と比較しながら、成熟した二者間での情緒的結び付きとアタッチメントについて考察する。Quinn によれば、*fago* は成熟した対人関係における「近接性 (Closeness)」「世話 (Care)」「喪失の恐怖 (Fear of Loss)」という三つの情緒的意味合いを love と共有すると同時に、これらの意味合いの表現方法には文化的差異が認められる。例えば、*fago* における「世話」は他者 (親族集団) に対する世話に限定される非互酬的な意味合いであるのに対して、love では互いに世話をし合うという排他的二者関係が強調される。このような比較を通して、

Quinn は、成人のアタッチメントを母子二者関係の延長として捉えるアタッチメント理論では、養育及び成熟した対人関係の情緒的結び付きが持つ意味合いの文化的差異が見失われている点に注意を促す。更に、文化が取り込まねばならない普遍的問題として発達早期における依存を位置付け、Mageo と類似した視点から依存に対する文化的防衛メカニズムを詳細に論じている (pp. 226-233)。

最後の「あとがき」(Gilda A. Morelli and Paula Ivey Henry) では、アタッチメント研究における文化的視点の意義が本書の諸論考と対応付けられながら確認される。その際特に、文化的視点がアタッチメント研究にとりわけ重要な影響を及ぼすテーマとして、「養育の協同性」「養育者の敏感性」「自己」「成人のアタッチメント」の四つが挙げられている。

以上、本書の要約を示した。最後に手短なコメントを述べたい。アタッチメントの文化要因に対する関心が高まる現在、本書は、人類学がこの研究動向において中心的な役割を演じる可能性を示唆しているように思われる。編者である Quinn と Mageo は、本書の多くの論考が依拠する資料がアタッチメントを対象とした研究に基づくものではなく、そのためアタッチメントの人類学研究は将来の課題である、と控え目に述べる (pp. 28-29)。しかし、評者はこの点を積極的に評価したい。本書は、アタッチメントを研究対象としたのではない伝統的な人類学的視点が現代のアタッチメント研究と関連付けられ得ることを示しているからである。その際特に重要となるのは養育文化の多様性という論点であるように思われる。人類学にはミードに代表される養育文化研究の蓄積があり、その重要性は現在も変わることがない。それは、この研究の伝統の中から生まれた「文化化」概念の本書における活用にも反映されていると言えるだろう。アタッチメントが形成される場としての養育環境がもつ文化特異性への注視は、人類学がアタッチメント研究に対して提供し得る重要な視点になると評者は考える。

このような意味で、本書は将来におけるアタッチメントの人類学研究にとって基本文献となる可能性を秘めている。ただし、本書で示されている人類学的視点が文化とパーソナリティへの強い関心を持つアメリカ文化人類学の学說的背景の上に成り立っていることを踏まえる必要があるだろう。それは特に、アタッチメントを媒介としながら心と文化の関連性を考察対象とする第七章及び第八章の論考が共に精神分析に大きく依拠していることに示されている。両論考がスパイロの防衛理論の再考を試みている点は、本書の学說的背景を理解する上でとりわけ示唆に富むように思われる。最後に、人類学がアタッチメント研究と協同関係を築くためには、アタッチメント研究それ自体の実りある蓄積への配慮が必要不可欠であることは言うまでもない。現在のアタッチメント研究の動向と成果に関しては、例えば『アタッチメントの手引(第三版)』(Cassidy & Shaver 2016) が指針となるだろう。

附記 本稿は、上廣倫理財団平成 28 年度研究助成金(研究課題「人類学におけるアタッチメント研究の現状と展望」)の助成に基づく研究成果の一部である。

参考文献

(日本語文献)

ボウルビィ、ジョン

1991 (1982) 『母子関係の理論 I』(愛着行動 1 新版)、黒田実郎ほか訳、岩崎学術出版社。

1993 (1988) 『母と子のアタッチメント——心の安全基地』、二木武監訳、医歯薬出版。

ワイズナー、トーマス・S.

2007 (2005) 「愛着の文化生態学的な問題の多元論による解決」、『愛着からソーシャル・ネットワークへ』マイケル・ルイス、高橋恵子編、高橋恵子監訳、pp. 143-153、新曜社。

(英語文献)

Ainsworth, Mary D. Salter, Mary C. Blehar, Everett Waters & Sally Wall

1978 *Patterns of Attachment: A Psychological Study of The Strange Situation*. Hillsdale NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Cassidy, Jude & Philip R. Shaver (eds.)

2016 *Handbook of Attachment: Theory, Research, and Clinical Applications* (3rd edition). New York: Guilford Press.